

# 道産針葉樹材を用いた内装材の見た目の好ましさの評価

技術部 製品開発グループ 松本久美子

## 研究の背景・目的

道産針葉樹材の用途拡大や高付加価値化のためには、今後構造材だけでなく内装材として用途展開していくことが必要です。また、内装用途と一口に言っても、使われる場所は、住宅のほか店舗などの商用施設や、学校やホールをはじめとする公共施設など様々です。本研究では、道産針葉樹材表面に現れる節が、内装材の見た目の好ましさに与える影響を評価するとともに、使用が考えられる場所の影響についても検討しました。

## 研究の内容



写真1 節のあるトドマツ壁材の例（上：少ないもの、下：多いもの）

節の量と見た目の好ましさを検討するため、節の無いものから多いものまで、トドマツの壁材をモデルとして4水準設定しました（写真1）。

また、内装材が使われる場所が、見た目の評価にどのように影響を与えているのかを評価するため、使用が考えられる住宅の居間のほか、学校やホール、駅や飲食店などの画像を作成して被験者に提示（写真2）し、指示された場所をイメージして、節のある内装材の好ましさを評価してもらいました。

評価は「好きーやや好きーどちらでもないーやや嫌いー嫌い」の5段階としました。



写真2 被験者に提示した写真の例（上：ホール、下：学校）

## 研究の成果

心理評価の結果を、下の図に示しました。住宅では、節の量が多くなるに伴って、評価は下がっていく、最も節の多い条件の壁材を提示したときには大きく低下する傾向が見られましたが、ホールや学校では、低下が穏やかであり、節の多い条件でも半数以上の被験者が「好ましい」と評価していました。このことから、評価は使用される場所の影響を受けることが示され、住宅にはうるさいような材料でも、使用場所を考慮することにより受け入れられるものと考えられます。

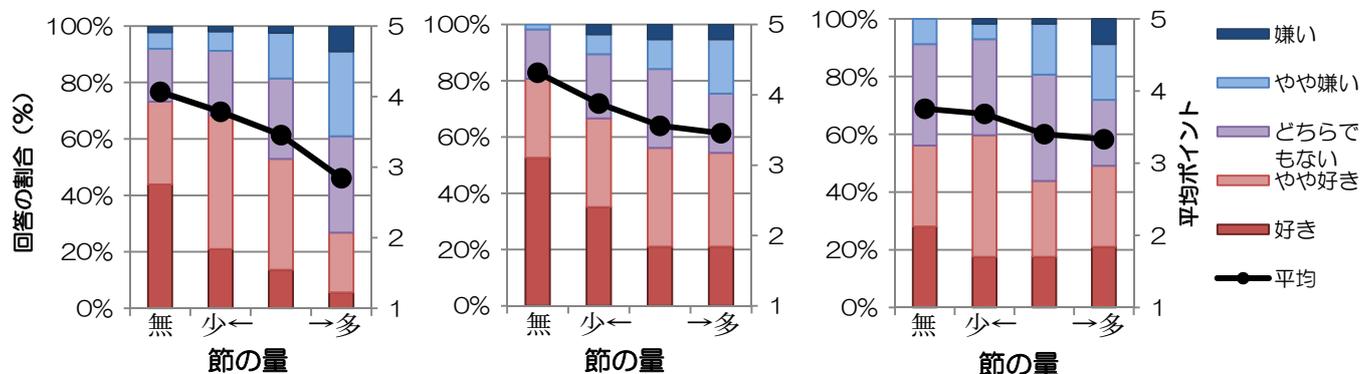


図 心理評価の結果（左：住宅，中：ホール，右：学校）

## 今後の展開

カラマツについても節（死節・生き節）と内装材の見た目の好ましさの関係について検討を進めていきます。